写真：「箱館真景」（函館市中央図書館蔵）

津軽海峡に面する函館港は、函館山の麓から西方へ湾曲した海岸線に位置します。江戸後期に来航したアメリカのペリー提督が、船上から見た絶景に驚嘆したほどの天然の良港。鎖国を解いて開港してからは異国文化が移入し、今日の西部地区に見られる美しい町並みを形成するに至りました。港内を行き交う船舶は帆船、連絡船、北洋船団の時代を経て、イカ釣り漁船、貨物船、フェリーなどへとその姿を変えましたが、市内中心部に響き渡る汽笛の音は、港町ならではの風情を醸し出してくれています。

2009（平成21）年には、函館の歩んできた長い歴史に、開港150周年という新たなページが刻まれました。あれから1年。函館、そして日本の歴史を変える舞台となった建物が、解体から139年の時を経て、夏真っ盛りの7月29日に復元・公開されました。その名は「箱館奉行所」、正式には「箱館御役所」と呼ばれ、城郭のイメージが強い五稜郭にその姿を現しました。多くの歴史的建造物が軒を連ねる、国内有数の観光地・函館に誕生する新名所は、見物のため訪れる人々に何を語りかけてくれるのでしょうか。

箱館奉行所と函館開港（その1）

中尾 仁彦　箱館歴史散歩の会主宰、第1回 函館検定 上級試験合格、NHKラジオ「どどんと道南ラジオ」に月1回レギュラー出演中。

高田屋嘉兵衛、そしてペリー来航と函館開港

日本が欧米に対して全面的に開国したきっかけは1853（嘉永6）年のペリー来航ですが、カムチャツカ半島からベーリング海にかけて勢力を伸ばしてきたロシアは、樺太・千島、さらには不凍港を求めて蝦夷地にも進出の機をうかがい、日露両国の衝突は必然でした。1792（寛政4）年に女帝エカテリーナ二世の特使ラックスマンが、大黒屋光太夫ら漂流船員の送還という名目で根室と函館に来航し、あわせて国交通商を要求します。幕府は北方に目を向けざるをえず、東蝦夷地を松前藩統治から幕府直轄領とし、1802（享和2）年に箱館奉行所を設置します。

豪商・高田屋嘉兵衛は日露対立の最中、幕府との協力により、択捉・国後、根室の漁場を開拓し、海産物を函館に集荷。それらを関西方面に運ぶ中継港として、函館は重要な役割を果たすようになります。その後、嘉兵衛はロシアに捕らえられながらも、献身的な姿勢を認められて信頼を得ます。しかし、ロシアとの密貿易の嫌疑で、1833（天保4）年に高田屋の膨大な財産が没収され、函館は一時火の消えた町となります。

1854（安政元）年、翌年に控えた開港の下調べをするため、ペリー提督率いるアメリカ艦隊が函館に来航しました。情報不足の松前藩はもとより、地元住民も大混乱に巻き込まれます。翌1855（安政2）年にアメリカをはじめ、イギリス、ロシア、オランダと次々に和親条約を締結し、緊急避難港、そして薪水・食料の補給港として世界に門戸を開きました。さらに4年後には、本格的な国際貿易港として横浜、長崎と共に開港し、各国の捕鯨船や商船そして軍艦が続々と函館港を訪れます。

「函館観光情報サイト　hakobura」より転載